

郡内研究

第 5 号

祖暁禪師とカゴメの童歌

窪田 薫

。はじめに

『甲斐国志』の僧英部にあげられている天巖祖暁禪師について、昭和四十九年禪師終焉の地静岡市深谷秀道院を訪ねて調査し、その結果を翌五〇年三月都留市教育委員会を通して、『甲斐の祖暁禪師』と題して報告した。



祖 暁 禪 師

本稿ではその後の禪師の研究、特に禪師が都留市上谷の大道（竜）山法泉寺八世住職の時、石工に命じて造らせた「カガメ地蔵」の伝承が、占いをかねた地蔵遊び（地蔵憑け）やカゴメの童歌（鬼きめ歌）や遊戯と深いかわりのあることが明らかになった。以下その理由について論述するものである。

一、カガメ地蔵について

元禄七年（一六九〇）都留市上谷曹洞宗大道（竜）山法泉寺八世住職となった祖暁禪師は、石工に命じて都留市大幡の石で地蔵菩薩の立像を刻ませた。

できあがって石工が厨子におさめようとしたが、石仏の方が丈が三寸ほど高く厨子におさまらず困っていると寺に戻ってきた禪師がそれを見て、「カガメや地蔵、カガメや地蔵、と唱えたとその法力により、めでたく厨子の中におさまった。」という伝承がある。

このことについて『甲斐国志』に、「大道（後に大竜）山法泉寺^{上谷村}八世元禄七年甲戌天巖祖暁入院ス、元禄十二己卯年四月開眼ノ偈ニ云フ、汝元来大幡山ノ石、我ハ是レ久遠実成ノ仏、曲躬^{かがめ}や地蔵曲躬^{かがめ}や地蔵ト、是ヨリ地藏少しシクカガメリト云フ。」と記してある。

二、カガメ地蔵お姿の解釈

(一)、昭和五九年十一月、都留市郷土研究会は埼玉県川越市方面の史跡見学を実施した。谷村藩主秋元喬知が宝永元年（一七〇四）五万石で転封した川越城に隣接した徳川氏との関係深い天台宗星野山喜多（北）院を拝観したあと、同寺境内に祀る市指定文化財五百羅漢の石仏を見学した。



カガメ地蔵

案内の枝折りに、「貴方によく似た羅漢さまが一体、眼鏡をかけた羅漢さまが一体あるからよく見て下さい。」と記してある。

先ず考えられることは、カガメ地蔵が俯いているお姿によつて、信者が地蔵菩薩の前にうづくまつて願をかけ、願い事が聞きとどけられたかと見上げた時、永観堂のみかえり阿弥陀のように俯いているカガメ地蔵の慈悲の眼と願主の眼とが通い合い、願いがかなえられたとしてその場を去る信者の姿が浮かばれる。

次に考えられることは、カガメ地蔵が厨子という制限された人物の中で、屈んだ（実は俯いた）苦しい姿勢で苦行しているお姿は、参詣する信者の苦悩する諸々の願いを身代わりとなつて引きうけ、耐え忍んでいる姿のように思われる。



祖暁筆忍の掛軸（安田家蔵）

枝折りの意について考えると、仏教や芸道で悟を開くことを開眼（かいげん）といい、また眼は心の窓ともいわれるが、自分の顔とよく似た羅漢さんを探すことによつて顔を合せ、眼鏡をかけた羅漢さんを探すことにより目を合すことができる。顔を合せ眼を合せることによつて信者の心（願い）が羅漢さんの心に通ずることを教えているのではないだろうか。

(二)、京都禅林寺永観堂の阿弥陀如来を「みかえり阿弥陀」とよんでいる。いくら折つても受け入れられない絶望に、生きる心地もなくなつて行く人に対し、みかえりよびとめて深い心をつきつけてくれる仏をあらわしたものとされている。

阿弥陀と地蔵は同体といわれていることから、阿弥陀と地蔵を併立した仏像や、阿弥陀のかわりに地蔵を中心とし、左右の脇侍として観音と勢至の両菩薩を配した三尊地蔵石仏像もある。

カガメ地蔵のお姿は屈むといつても実は俯（うつむ）いていた姿で、眼はやや下方に向けられている。俯いた姿のカガメ地蔵を屈むと表現したところに、深い意義が秘められているように感じられる。このことについて考えてみたい。

禅師が「耐え忍ぶ」ということが、人間の生活に如何に大切であるかを論された証として、都留市上谷大幡の安田家所蔵の禅師が揮毫した掛軸に、「忍為徳不可及・持戒苦行」とあることでも知られる。

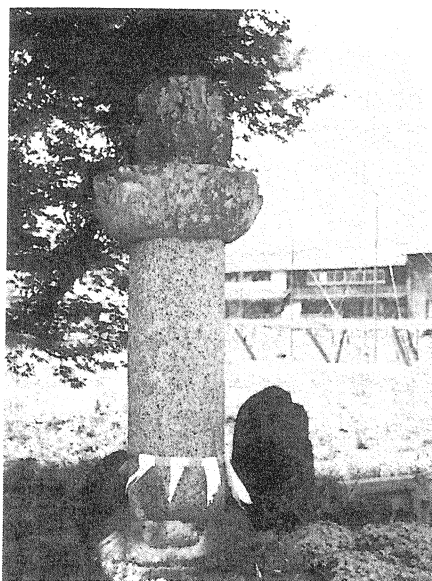
三、廻り地蔵について

「六地蔵」は六道能化ともいわれ、六観音と同様に六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人道、天道）に現れて迷える衆生を救われるとのことである。特に地獄に落ちた盲者については、閻魔大王の変化身となつて救いの手をさしのべて下さる有難い地蔵さまである。そのような関係から都留市上谷法泉寺のカガメ地蔵も十王堂に安置されている。

昔から地蔵が廻るという伝承が全国的にある。埼玉県羽生市では地蔵菩薩が厨子ごと家々を廻る習俗がある。東京都狛江市曹洞宗泉竜寺の地蔵菩薩も、月の二五日から翌月の二二日まで厄除けのため、檀信徒の家を一夜ずつ廻っていくとのことである。都留郡では大月市強瀬の愛宕地蔵が「火伏せ地蔵」といわれ、年の暮れには火の用心の夜廻りをするといわれている。

また石幢の龕部に刻まれた六地蔵が廻るという伝承が

ある。『裏見寒話』に「甲府の廻り地蔵」と題して、「葦崎を経て新府城跡へ行く途中に石燈籠あり。此火袋に六地藏を刻みつけた。是は弘法大師当国へ来たりし時分から石工をなして地藏を彫みつけた」と。此の火袋常に循環して暫くも止むことなし。万代不易、仏法流布の証跡とすると。然りと雖も燈籠の廻ること人目に見え難し。依って行く時に紙に印をつけおき、帰る時これを見れば、西に在りし紙帰りに東に廻るといふ。」としてある。



紫金山瑞蓮寺にある石幢

東八代郡一宮町田中の浄土宗紫金山瑞蓮寺境内にある石幢の龕部に刻まれた六地藏が自然に廻ると伝えられている。この六地藏は病氣その他で苦しんでいる衆生を救ってくれるとのことである。

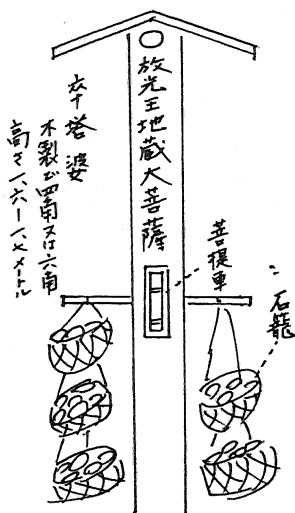
(一)、廻り場

昔は葬式は土葬で、近親者が柩を担って菩提寺まで行き、本堂前の「廻り場」を担ったままで数回廻り、それから本堂に安置する。廻り場を廻ることを「地藏廻り」「六道廻り」ともいって、寺の本尊が地藏菩薩である場合、特に地藏廻りが行われることが多い。

『甲斐国志』によると、都留郡では上野原町西原の臨濟宗宝珠寺の御本尊延命地藏（県指定文化財）をはじめ、地藏菩薩を本尊とする寺が二九ヶ寺あり、そのうち都留市では、大幡の曹洞宗大幡山広教寺の御本尊延命地藏（都留市文化財）ほか、地藏菩薩を御本尊とする寺が七ヶ寺ある。

(二)、菩提車（地藏車）

『東遊雜記』（古川古松軒著）の天明七年（一七八七）奥州会津での旅日記に、街道にそって奇妙な卒塔婆の建ててあることを記している。「四角な石柱のやや上部に



奥州の街道にある卒塔婆

冬七十九世堯福」とある。

四、地藏遊び（地藏憑け）

(一)、滋賀県伊香郡地方の童歌に、一人の子供が円の中に入ってかがみ、その鬼を中心にして他の子供が輪になって廻り、「なかのなかの小仏さん（又は弘法さん）なんで背が低い、親の日にと食って、それで背が低い、後ろの正面だあれ。」（歴史公論より）

(二)、「中の中の仏ばば（又はこぼうさん）親の日にままくつて、ととくつて、ほんでん腰がかがんだ、立ってみよ、お前の前に誰がいる。」（旅と伝説より）

(三)、山形、宮城、青森の各県まで広がった地藏遊び（地藏憑け）とよばれる習俗では、一人の子供に南天の葉を握らせ、顔にあてて座らせる。その鬼をとりまいて多数の子供たちが、ぐるぐる廻りながら歌をうたう。歌詞は地方により異なるが一例をあげると、「南無地藏大菩薩、おのりやれお地藏さまよ、お地藏申せば、天までひびく、天もゆらゆらとゆらめしごぜん、お地藏さまよ。」と歌われる。

東京都調布市深大寺に地藏車石塔がある。塔は角柱で上部には蓮台上に座した地藏菩薩が安置され、石柱の中央には穴を穿って車がとりつけてある。車には一文字ごとに横に句切り線が入れてあり、南無阿弥陀仏の六文字が刻まれている。石塔の側面に「文政十一年（一八二八）

東北福島地方にも大人の地藏遊び（地藏憑け）があり、輪の中に入る者は南天と笹の葉をもつてかがみ、他の者

はかがんだ者を中心として輪になつて廻りながら、「一より二けんじや、三かの四はらい、五だいのまきもの、六、七災難、八方どがためて、九ほんとのい、十ほんまつれば、おんりの申せば、天までひびく、天もゆらゆら地もゆらゆらと、ゆらめきやぎぜんのお地藏さま。」と歌つて廻っている間に、南天と笹をもっている者（地藏に該当する者）の体がふるえだし、横に倒れると神がかりとなり、色々のことを教えるという宗教的な遊戯で、カゴメの遊戯歌の「後の正面だあれ」と目をふさいだまままで後の人を当てる占ないのしぐさに似ている。（歴史公論より）偏



道志村池谷家に祀る「上げ仏」

四、南都留郡道志村長又集落の池谷家（屋号板垣）の裏の畑に、石幢の龕部（六角の面に六地藏を刻む）が祀つてあり、その上に丸石が置いてある。近所では泣く子をだまらせる地藏さまとして知られているが、この龕部の上の丸石を神子（巫子）にあたる人が上げ下げして、その軽重によつて諸事を占う「あげ仏」として信仰されている。

五、カガメ地藏とカゴメ歌

「鬼ごと遊び」にかかわる鬼について考えると、鬼は当初は人間生活をおびやかす擬人化された空想上の怪物であつた。やがて仏教信仰にともなつて鬼観念は一層普及した。

例えば寺の本尊を安置する須弥壇の四方に四天王（持国、増長、広目、多門）を配して本尊（仏教）を守護しているが、足下に邪鬼を踏みつけている。

また節分には寺社をはじめ一般家庭でも、鬼打豆と称して炒った大豆をまいて鬼を家から追い払う。

「遊戯の鬼ごと」は、鬼としての古い追儼（宮中の年中行事の一つ、大晦日の夜悪鬼を払い疫病を除く儀式）の作法を小供が模法したものである。カゴメの遊戯の起

源は、元禄一二年四月祖暁禪師が上谷法泉寺在住の時開眼した「カガメ地藏」の伝承と深いかわりのあることが知られている。俯（うつむ）いている姿の地藏を屈む（かがむ）と称するのも意味のあることと考えられる。

（一）、宝永三年（一七〇六）に発行された『黄表紙本』に、「江戸時代浪人夫婦にお鶴とよぶ娘があり、家が困窮のため遊女にでたが、娘が籠にのせられて家を出る時、両親はお鶴お鶴とよんで泣き悲しんだ。」と記しており、カゴメ歌は拘束された遊女の生活を歌っているのではないかとの説がある。

（二）、大正時代行われた子供たちのカゴメの遊戯は、「鬼になつた者が、手をつなぎ円形をつくっている他の者の中心でかがみ、両手で眼をかくす。円形をつくっている者がカゴメカゴメの童歌（鬼きめ歌）をうたいながら鬼を中心に回り、歌が終るとその位置でとまる。鬼は眼をかくしたままで自分の直後にとまっている者の名をあてる。あたつたら鬼はあてた者と交代し鬼になつて遊戯を同様繰り返す。」

（三）、カゴメの童歌の歌詞について、天保一五年（一八四四）の『幼稚遊音雛形』という江戸時代の本に、「かあ

ごめかごめ、かごのなかのとりは、いついつねやる、よあけのまえに、つるつるつつべいた。」とあり、現代も歌われているカゴメ歌の源ではないかといわれている。

四、『ふる里谷村のわらべ歌』（安藤千鶴子著）では「かあごめかごめ、籠の中のとりは、いついつ出合う、十日の晩に、つるつるつつべいた。」とある。

五、『鳴沢村の民謡とわらべ歌』では、「かごめかごめ、かごの中のとりは、いついつ出やる、よあけの晩に鶴と亀とすべつた。後ろの正面だあれだ。」とある。

このカゴメカゴメの遊戯を法泉寺のカガメ地藏の伝承と比較すると、鬼はかがんだお姿の地藏菩薩で、鬼を中心に廻る者たちは、菩薩を拘束する厨子に相当するのではなからうか。また家族の生活苦を背負つて遊女に売られた浪人の娘お鶴は地藏菩薩で、お鶴を拘束する遊郭が厨子にあたるものと考えられる。

〇おわりに

すでに述べたようにカガメ地藏の伝承と、地藏遊び（憑け）と、カゴメカゴメの遊戯は一脈相通するものがある。このことを表示すると次表の通りとなる。

	カガメ地蔵	地蔵遊び（憑け）	カゴメ歌と遊戯
(1)	・中心は厨子の中におさめられた 俯いた（カガメ）地蔵。	・中心は地蔵になぞらえた、大人 （巫女）と子供。	・中心は鬼になぞらえた子供。
(2)	・地蔵は廻るといわれる。 ・厨子は囲い。	・輪になって廻る。 ・地蔵になった者を輪で囲む。	・輪になって廻る。 ・鬼になった者を輪で囲む。
(3)	・問い（願い）に対し、正しく答 える（聞きとどける）	・輪になっている者に対し、占う （教える、当てる）	・輪になっている後の者の名前を 当てる。
(4)	・願う人に代って、その苦しみを ひき受け背負う。	・占うことによって、人の心配ご とを除く。	・一家の生活苦を、身代わりにな って背負う。

右表のカガメ地蔵欄の(3)の関連事項として、天巖（甲斐の）祖暁禅師の晩年の法話の一節に、「…今日の家業の上、医術、陰陽、兵法の極意までも縦横に説示せん。一々問い持ち来れ、毫釐も遲疑に渡り、渋滞するあれば我妄語の人なり。又我神儒仏の至理を談じて錯誤なきを

期す。吾答処該の道の要義に中らずんば吾先ず其妄語の罪墮獄の報あらん。……」と述べている。

祖暁禅師が入寂されて三三六年の年月が流れ去ったが、元禄一二年禅師三三歳、上谷法泉寺住職の際、開眼供養したカガメ地蔵の伝承は、今なお子供たちの遊戯とカゴ

メの童歌の中に引き続がれている。

・甲斐国志 甲府勤番支配松平伊予守定能が、甲斐の国に地誌のないのを嘆いて、文化二年（一八〇五）起稿、十年の歳月を経て十一年完成する。

『甲斐の祖暁禅師』に本稿を追加し、謹んで禅師の御霊前にささげる次第である。

・歴史公論「雄山閣」出版、No.52（昭和五五年三月一日発行）項目「地蔵信仰、観音信仰」

主なる参考文献

・裏見寒話 享保九年（一七二四）甲府勤番として赴任した野田成方が、甲斐の地理に関して記載したもの。

・甲斐の祖暁禅師 拙稿、昭和五〇年三月、都留市教育委員会より発行。

（都留市つる三―三―五）

天巖祖暁禅師年譜

年代	西暦	事 項
寛文七年	一六六七	一〇月二日、都留郡中津森字大奈良（現都留市金井）の佐藤家の次男として生まれる。
延宝二年	一六七四	七歳の時、光る螢を調べるため、多くの螢を殺して生と死に疑問をいだき、同村富春山桂林寺の霄外和尚（湘外祖景和尚か）を訪ねて生死を問い、ついに童髪を落として同村曹洞宗千眼山江西院の一山徹公禅師について仏門に入る。
元禄一年	一六八八	禅師二二歳の頃、加賀（石川県）大乗寺の徳翁良高禅師について参禅修業中、曹洞宗を代表して黄蘗宗の高僧千丈和尚と禅問答をし、和尚を勘破して宇治の黄蘗宗万福寺から、「曹洞禅滅却」の額を持ち帰ったという有名な話がある。

元禄五年	一六九二	得度の師である金井江西院の一山徹公禪師が老齡のため、孝養をつくす目的で都留郡に帰る。
元禄七年	一六九四	上谷村（都留市上谷）曹洞宗大道（竜）山法泉寺の八世住職（同寺中興の祖）となる。
元禄三年	一六九九	四月二四日、法泉寺地蔵菩薩（カガメ地蔵）の開眼供養をする。
元禄三年	一七〇〇	三三歳の時、江戸に赴き、徳翁良高禪師より印可（弟子に奥義を授ける）を受ける。
宝永三年	一七〇六	師の席を継いで江西院（現在廃寺）の住職となる。
正徳元年	一七一	秋、相模（神奈川県）愛甲郡荻野村松石寺一七世住職として転任。
正徳四年	一七一四	駿河（静岡県）安部郡領主本田信門の招きに応じ、薬科郡宇深谷の深谷山秀道院の開山となり、安部川下流の護岸、水田開発事業の心のよりどころとなる。今に祖暁新田の名残る。
享保八年	一七三三	八月、三五万石の領主井伊家七代直惟公の招きに応じ、信門の配慮もあり、井伊家菩提寺彦根（滋賀県）清涼寺の住職となる。
享保二年	一七二六	三月、禪師は清涼寺を退去し、秀道院に戻る。
享保二年	一七三二	春、都留郡に帰り、大衆を強化したが病氣のためやむなく深谷に戻り、一月二日、秀道院で六五歳で入寂する。 秀道院の禪師の位牌に「当院開山天巖暁大和尚禪師」とある。
		遺偈 六十五年 徒成惡辣 六十五年 徒ニ惡辣ヲ成ス 今日消尽 不徧界蔵 今日消エ尽ス 徧界蔵レズ